

「標準救急医学」

監修 日本救急医学会

編集代表者 帝京大学教授 小林国男

よい本である。日本救急医学会が救急医学教育の標準化を目指して作った教科書というだけあって、まさに出色の出来栄えというべきであろう。

本邦における救急医学は、学問的な体系づけがなされてまだ間もない新しい医学の分野である。救急医学を正式な講座としている大学もまだ十指に満たない。しかしその一方では、救急医学の重要性はよく認識されており、救急医学講座のない大学でも各科の中で断片的に救急医学の教育が行われている。ただしその効果は必ずしも十分とは言えない。

以前、出血性ショックの患者が運ばれてきた慌ただしい雰囲気の中で、何と患者の足底をこすってバビンスキー反射を調べている奴を見たことがある。臨床経験6、7年の医師である。バイタルサインや血算はナースや研修医がやるので、自分は何をしてよいかわからないという。彼は学生時代に、外科や産科などの講義で出血性ショックを習ったが、

それは各科の系統講義の僅かな一部で、まとまった知識としては憶えていないという。

失血量と輸血の指標にCVPを入れ、代謝性アシドーシスの程度を知るために血液ガスを測り、腎障害と末梢循環を調べるために尿量を測る、といった極めて当たりまえの簡単な処置が彼には思いつかなかったのである。各科で断片的な「救急医学的」講義をしている限り、こうした「バビンスキー医師」の出現は防げない。救急医学の教育はやはり1つの独立した学問として総括的な見地から行うべきであろう。

特殊な症例は別としても、例えば出血性ショックのような一般的な救急患者を目の前にして、どのような処置をどう行えばよいかぐらいの知識は、医師としての最も基本的な必要条件であろう。

しかし、では医学生にまず何をどの程度教えるかということになると、多くの大学では前述のように各施設で適当に行われていて、全く基

準がないのが実状である。1つには救急医学の対象が極めて広範多岐なことにもよるが、教育の準拠とすべき指標がないことも大きな理由であろう。

この「標準救急医学」を手にして、今やっと学生が学び、教師が教えるべき救急医学の基準を得た感じがする。救急医学という膨大な領域の知識が、この本には実に簡潔に要領よくまとめられている。救急医学の第一線で今最も活躍している執筆者の方々が、病態に始まり、診断、治療の基本からハイテクを駆使した最新の技術までを明快に解説しているのは見事というほかない。しかもそれらは、技術的な面よりも、救急疾患の病態を理解させる立場に重点を置いて記述が進められており、教科書という基本的な知識を修得させる目的にかなう最適の書といえよう。

救急医学の教科書として、現在これ以上のものはあるまい。学生、研修医をはじめ、広く救急医学に携わる人々の必携の好著として、自信をもってお薦めできる一書である。

(東京医科歯科大学教授・麻酔・蘇生学)
天羽 敬祐

●B5 456頁 1991年
定価 7,725円(税込) 送料 300円

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)